

追跡!! SGU 第7回



～大切なのは使命感～ 久木田 純 SGU招聘客員教授 インタビュー①

とつである「国連・国際機関へのゲートウェイ構想」の推進に携わることとなった。2017年度開設予定の大学院「国連・外交コース」の授業を担当するほか、「関学国際機関人事センター」の中心として、学生のサポートも行う。

「危機感」から世界へ

新聞総部記者（以下、記者）：まずは御略歴を教えてくださいますでしょうか。

久木田純先生（以下、久木田）：私は、福岡県の高校出身で、西南学院大学に進学しました。その後、九州大学の大学院で教育心理学を学び、修士・博士課程で学びました。大学院在学中には8ヶ月のシンガポール留学も経験し、そこでは民族関係論といった社会科学系の勉強をしました。そして、博士課程の修了直前に外務省のJPOと呼ばれる国連に職員を派遣するための試験に受かり、国連の世界に飛び込みました。私は子どもの能力を最大限発揮できるような世界を作りたいと思っていたのでUNICEFに勤務先を決め、その後東京の駐日事務所やナミビア、ニューヨーク本部などで様々な課題の解決に当たっていました。そして、2007年からは東ティモール、カザフスタンの両国で代表を務め、昨年国連を定年退職しました。その後、日本でグローバル人材の育成をしたいと考えていたところ関学に声をかけていただきました。記者：なぜ、国連でお仕事を

されようと思ったのですか？

久木田：私は1955年生まれで、100歳まで生きようと考えたのですが、2055年に世界はどうなっているのだろうかという危機感も持っていました。当時は核戦争の危機や公害問題、飢餓や難民問題と様々な問題が世界で起こる一方で、素晴らしい文化、風習が世界中にあり、多様性と危機感が共存していました。その中で「日本を出て海外で仕事をしよう」という思いが湧き出てきました。これが18歳の時でした。その後私は100歳までの人生設計を立て、その中で様々なキャリアを考えました。商社マン、ジャーナリスト、研究者、外交官などです。どれも世界を股にかける仕事でしたが、私にはしっくりこないと感じました。そんな時に図書館で国連職員について紹介した本を読んで、「これだ!!」と思いました。それが20歳のときでした。国連職員になるには10年近い長期的な能力構築が必要でした。でも、国連では自分がやりたいと思った仕事が出来たのでやりがいがありました。死と隣り合わせになったことも何度かありました。記者：死と隣り合わせですか。怖いとは思わなかったのですか？

久木田：そうですね、あまり感じなかったですね。確かにここで死ぬのはもったいない、生きていたいとは思いましたが不思議と怖いとは感じませんでした。

東ティモールでの「奇跡」

記者：国連時代、記憶に残っている出来事はありますか？

久木田：東ティモールに赴任直後、ノーベル平和賞を受賞したラモスホルタ大統領に「若者が喧嘩をするから止めさせてほしい」と頼まれました。東ティモールでは独立以前、兵士から身を守るために若者たちが武道を習得していました。ところが独立後も若者たちは武道の技で争いを続けていて、そのために平和構築が難しい、何とかできないかということだったので。記者：なるほど。久木田さんはその依頼を受けて、どのようなことを考えたのですか？

久木田：私はいろいろ考えた末に、ジャッキー・チェンに來てもらおうと考え、依頼しました。けれど、最初は映画の撮影などで忙しく難しいと言われました。それから数ヵ月後、大統領が狙撃され瀕死の重症を負った際に改めてお願いしたところ、快く引き受けてくれたのです。ちょうど北京五輪（2008年）の開催時期で開会直前の1週間、彼のスケジュールが空いていたのです。東ティモールに來

た彼は、スタジアムに全ての武道の流派を集めました。その数およそ5000人です。警備のために軍や警察がスタジアムを取り囲んでいました。記者：具体的にどのようなことを行ったのですか？

久木田：彼はスタジアムに着くと武道の型（空手やカンフー）でいう構えの「こと」を流派の垣根を越えて皆と一緒にやりました。その後、「武道を暴力や争いのために使わないでほしい。武道の技は人を育て、相手を尊敬し、その力を使って仲良くするために使ってほしい」と語り掛け、帰国の途につきました。するとその日から若者の争いが見られなくなりました。軍や警察が止められなかった喧嘩が、彼の一言でびたつと収まったのです。それ以来、東ティモールはとても平和になりました。

記者：それはすごいですね。久木田：国連職員はその国の未来を左右するリーダーや隣間に会える事がありません。ネルソン・マンデラやアウンサン・スーチーとも会いましたよ。独立直後のナミビアのある村に行つて任務に当たった際にその村の村長から感謝の印として大きなヤギをもらったこともありました。こうした一つ一つの出会い、心のこもった感謝の場面が印象に残っています。

○ ○ ○
今回は、4月から本格的に募集を開始する大学院「国連・外交コース」についてのお話、求められる学生の姿やコース内容についてお伝えします。



取材に応える久木田純先生